

# 職場における交通安全指導 Part.12

## 子どもの交通事故防止

春になると、子どもたちも戸外で遊ぶ機会も多く、この時季に多くなるのが子どもの交通事故です。そこで本号では子どもの事故について掲載いたしますので社内の運転者安全指導にご活用ください。

事例1：Aは渋滞中の国道交差点で、信号待ちのため停止していたが、信号が青色に変わったので急ぎ発進したところへ横断歩道を左側から走って来た渡り遅れの子どもに気が付かず、跳ねて重傷を負わせた。

### 〈事故はこうして起きました〉

この事故はAの注意が信号機だけに集中していたこと、交通渋滞のため予定の納品時間が遅れることもあって、急ぐ気持ちが強く、そのために横断歩道上の左右の安全確認を怠ったことが最大の原因といえます。なお、Aの左側に停止していた車は子どもに気付いて発進しませんでした。その時点で「何かあるな」と危険を予知できなかったことも要因の一つです。

### 〈事故はどうしたら防げたでしょうか〉

信号待ちのため、交差点手前を先頭位置で停止する場合の心構えとして、信号が青色に変わったからといって、すぐに発進しないことです。

青色の意味は“進め”ではなく“安全を確認して進むことができる”なのです。

また、歩行者(特に子ども、高齢者の場合)は歩行者専用の青色が点滅していても、まだ渡れると思っている人は少なくありません。

このため、渡り遅れの歩行者がいるかもしれないという危険予知を怠らず、横断歩道上の歩行者の有無をしっかりと確認した上で、ゆっくりと発進することです。

急ぐ気持ちがありますと、やみくもに先を急ぎたい衝動にかられ、つい無茶な運転をしたり、事例のように安全確認をしなかったり等、危険性が高くなります。時間的な余裕がない場合には、しばしば急ぐ気持ちが強くなるものです。

時間にゆとりを持たせるために、意識して早めに出発させることも大切です。

### 〈特に次の点について指導しましょう〉

予め、渡り遅れの歩行者や飛び出しがあるかも知れないと予測して、信号が青色に変わったからといって急発進は絶対しないように指導する。

「急ぎの心理」状態では、情報取得が不十分となり、ゆがんだ状況判断を行い、それが事故に結び付くことが多いので、「ゆとり」のある運転を励行するよう指導する。

子どもは、ものごと全てを自己中心的に考え行動する傾向があり、次の「子どもの行動特性」を理解させる。

友達同士で歩いている子どもは離れると、一緒になるうとして急にかけ出したり、横断したりする。

車はいつでも止まってくれるものと思って、車の速度や距離を考えず、車が接近しているのに横断をはじめることがある。

遊びに夢中になると、遊ぶことだけに気をとられ、目の前に車がきても気が付かないことがある。

